本章の目次

第１幕	古代オリエント	――沼地と砂漠の文明
第２幕	古代ギリシア	――明るい海洋の文明
第３幕	ヘレニズム	――英雄のつくり出した世界
第４幕	古代ローマ	――すべての古代史はローマに注ぐ
第５幕	キリスト教の成立	――罪と罰

近代以降のヨーロッパ

ヨーロッパは、ルネサンスより中世からの脱却を進め、フランス革命によって自由と平等を理念とする「近代」という時代を打ち立てます。欧米諸国はこの「近代」という概念をもって世界を征服しました。では、それ以前、ヨーロッパが歴史の覇者となる以前、ヨーロッパはどのように歴史を歩んでいたのでしょうか。

エピソードゼロ

19 世紀の大歴史家ランケが「一切の古代史は、いわば一つの湖に注ぐ流れとなってローマ史に注ぐ」といったように、これから見ていく歴史は最終的に古代ローマにて綜合されていきます。古代オリエント、古代ギリシア、それらをアレクサンドロスが融合させてヘレニズムという世界を築き上げ、そしてそれをも飲み込んでしまった世界が古代ローマです。

なお、第１章の歴史の過程で、ヨーロッパには二つの文化的潮流が生まれます。ヘブライズムとヘレニズムです。ヘブライズムとはユダヤ教からキリスト教に至る一神教文化、ヘレニズムとはギリシアの神々を中心とする多神教文化です。現代を生きるヨーロッパ人は世界をどのように見ているのか、その根底にある世界観が形成されることになります。

第1幕 古代オリエント――沼地と砂漠の文明

日の昇るところ

舞台は砂漠の多い乾燥した地域。各地には荒涼たる砂漠と矮小な灌木の茂る荒野、そこにわずかに点在するオアシス。気候は著しく乾燥しており、多くの土地は1日の間に灼熱の炎天から寒冷な夜へと変わります。そこは、日本の四季の美しさとは無縁の、厳しい自然の支配する世界です。

「オリエント」は現在の中東地域を指し、ラテン語で「日の昇るところ」を意味します。イタリア半島のローマ人から見てこの地が東方に位置していたためです。この地域は、大きくメソポタミアとエジプト、そしてその間に挟まれた地中海東岸の三つの地域から構成され（図3）、個性の豊かな民族たちが活躍しました。やがて、この三つの地域を統合する巨大なアッシリア

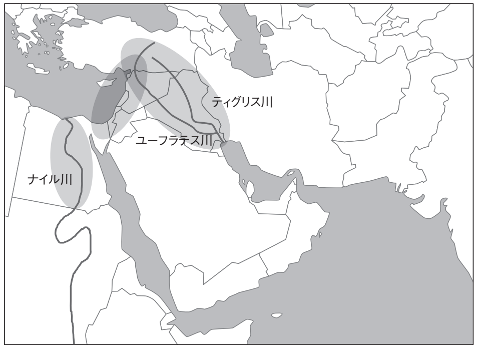

図3　オリエント（メソポタミアとエジプト）

第14幕 中世西欧世界の変化─新たな時代の兆し

もたらされたもの

11世紀末から13世紀にかけて起きた西欧の外への爆発、すなわち十字軍やレコンキスタ、そして土地の開拓と商業の発達、これはヨーロッパに何をもたらしたのでしょう。そして次なる展開は、どのように近代という時代に接続していくのでしょう。

14世紀から15世紀にかけては次のことが生じます。

◎封建社会の崩壊（領主の没落と農奴の解放）
◎教皇権の弱体化
◎皇帝権の弱体化
◎王権の強大化と国家の中央集権化

要するに、中世という時代を特徴づけていたものが次々と崩れ去り、新たな時代の兆しが見えはじめるのです。

封建制度の崩壊

十字軍への長年の従軍は、領主（諸侯・騎士）たちの疲弊、没落を促しました。また、イスラーム世界から火器が伝わったことで、騎士はその歴史的役割を終えることになります。

一方で、農奴たちはその地位を向上させました。その理由は次の通りです。

◎商業の発達によって貨幣経済が浸透、蓄財が可能となり富裕化した
◎黒死病（ペスト）**の流行によって農奴人口が激減、相対的にその地位が向上した**

この疫病は、イタリアの商人が感染することによってアジアからもたらされ、１３４８年には全ヨーロッパで大流行します。特に衛生状態の悪い農村で猛威をふるいました。この病気は実に恐ろしいもので、咳や血の混じった痰が出たときにはもう死神に憑かれています。やがて高熱に冒されて精神は乱れ、うわごとをいい、呼吸困難を来すようになります。最後は、全身の皮膚が黒く変色、おぞましい死に至ります。まだウイルスの存在が発見されていない時代です。見えない魔の手に人々がどれほどの恐怖に襲われたかは想像に難くありません。人々は様々